

35 『南溟浅井先生口授』と浅井貞庵『傷寒摘句集』の研究

星野 卓之, 小田口 浩, 花輪 壽彦

北里大学東洋医学総合研究所

北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部で近年入手した尾張・浅井家関連写本のうち、浅井正路(南溟)・浅井正封(貞庵)の講義録2点につき、諸本と比較し若干の知見が得られた。

『南溟浅井先生口授』は、本文14葉の写本(一冊)で、岡山大学所蔵『尾陽南溟先生口授方候』と共通する内容を含む口伝書である。後者で完備している編名で前者の記載順を記すと、肺疳湯・三靈湯・心虚鬱痰候治・十五味安榮湯・七味清脾湯・黄疸病候並主治・九味柴胡飲子・百合湯・疔瘡・心下痞ニ八物湯ノ用様・食滯眩暈治方・灸火逆上治方・風毒腫候辨・抑肝散治方となっている。さらに一方にしか存在しない編名を挙げると、前者では禹水湯・脾勞丸、後者では霍乱五苓散用方・舌候・遺精論并主方・君火相火論・新製征虢湯となっていた。処方の解説は北尾春圃『当莊庵家方口解』卷之四からの抜粋であり、「心虚鬱痰」に関して講義した内容とみられる。表題のとおり南溟の講義録であれば、北尾春圃の尾張家への影響は南溟の代にさかのぼることになり、貞庵が『方彙口訣』卷二傷寒で「後世日本ノ医者デハ北尾春圃ガ一番ノ上手也」とし、同書中で度々北尾春圃を引用したこととも符合する。

『傷寒摘句集』は三分冊の写本で、表題下には各本の内容を表し「発端 序 辨脈 平脈 傷寒例」「瘧濕喝 太陽上」「太陽中」と記載され、三冊目の最後に「太陽中篇畢」とある。各章の筆頭には「傷寒論 堯甫先生講辨」という題があり、続いて章名の下に「門人」と記され、浅井貞庵の講義録であることがわかる。

東京大学所蔵の『貞庵先生語類』には「講義発端」が記載されており、『傷寒摘句集』にある各章の発端も「傷寒論発端(四十一丁)」から「辨太陽病第六(六十一丁)」までとほぼ一致する。前文括弧内の丁数は『貞庵先生語類』の表紙裏にある目次によるが、その続きを見ると、さらにこの講義は「辨発汗吐下後脈証并治法第二十二」まで記録されており、太陽中篇で終わっている『傷寒摘句集』が残欠本であることが確認できた。

一方、岡山大学所蔵の『堯甫先生傷寒論口義』は「辨太陽病脈症并治法第五」から「辨厥陰病脈症并治法第十二」までを記載する写本(一冊)だが、『傷寒摘句集』と内容は似ているものの文章が全く異なり「発端」も『傷寒摘句集』『貞庵先生語類』と一致せず、別の講義集と見られる。

『傷寒摘句集』には発端だけでなく、本文の簡潔な解説も含まれている。門人の筆記ではあるものの、浅井家で重視する辨脈・平脈篇、傷寒例について、貞庵の講話内容が確認でき、浅井正賀が大幅に増補した『傷寒論口訣』(オリエント出版社『傷寒金匱口訣選集』第一冊所収)と比較検討できる点で貴重と考えられる。この『傷寒論口訣』は貞庵講話、男・正翼(紫山)筆記、孫・正賀補考によるもので、その序文に「説の原く所の者は祖父貞庵翁の講話にして先考紫山翁の筆記する者なり。其の手沢創本今存して十数巻あり。然れとも星霜已に五十年に及ばんとす。惜ひ哉、多くは蟲鼠に汚蝕せられ披閱に破裂して其の文字の読み難き子子蚯蚓のノノ聚散するが如し」と記し、門人の写本が正確でないことにも言及している。しかし今回発見された『傷寒摘句集』の本文が本来の貞庵による講話の一部を残したものとすれば、比較検討する価値があるものと考えられた。